

---

# 最小不幸の王子

深川辰巳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

最小不幸の王子

### 【Nコード】

N1761P

### 【作者名】

深川辰巳

### 【あらすじ】

とある町の広場にたたずむ像は最小不幸の王子と呼ばれ、金箔で覆われていた。

そんなある日冬支度をするツバメが王子のそばに近づいたことから話は始まった。

（どこかの国のどこかの首相のことではありません。ええ、決して実在はしません。だって像の話ですから……

昔とある町の中心にある広場に『最小不幸の王子』と呼ばれる像が立っていました。

どうしてそのように呼ばれるようになったかわかりませんが、その像は金箔で覆われてとても綺麗に輝いていました。

赤や黄色に色づいた木々の葉が吹き抜ける風に舞い落ちる頃、一羽のツバメが冬にむけて南へ渡る支度に勤しんでいました。

そんなツバメが王子の足元で餌になるものを啄んでいると、突然冷たい雫が頭の上には降ってきたので上を見上げると、それは雨ではなく王子の瞳から流れているものだと思付きました。

ツバメは王子の肩まで飛んで行って尋ねました。

「王子様、王子様。何を泣いているのですか？」

「ツバメ君、あれをみてごらん。あそこの家庭は子沢山で養育費に苦しんでいるんだ。

彼等の不幸を減らしてあげたいけど、僕は像で動けないから助けてあげることが出来ない。それが悲しいんだ。

そうだ！ ツバメ君。僕の金箔を剥がして彼等に渡してくれないか？」

「王子様、王子様。私は今、南に渡る準備をしています。早くしないとYEN高が進んで、このままでは年が越せなくなるのです。それに同じ境遇の人達にも渡すのですか？ もしそうなら、いくら王子様に金箔があっても足りませんよ。

さらに彼等に一時的に金箔を渡してどうなるのでしょうか？ 例え苦しくても自分の力で今の境遇を乗り越えなければ、誰かがまた助けてくれると甘えるようになるでしょう。それはかえって不幸ではないでしょうか？」

「ごちゃごちゃ言わずに持って行ってくれないか？」

YEN高は注意深く見守る。

金箔なら十分にある。

不幸な市民を経済的に支援したいんだ」

多くの市民に支持されて建てられた王子は有無を言わさぬ強い口調で訴えると、ツバメは渋々王子から金箔をはがして、子だくさんの家を持って行きました。

「王子様の言うとおり金箔を渡してきました」

「見ていたよツバメ君。彼らはとても喜んでいたね」

「王子様も満足されたようですので冬支度に戻ります」

「待ってくれ、ツバメ君。あれを見てくれ。あの農家は今年作物が不作で貧しいんだ。この金箔を持って行って所得を保障してあげたいんだ」

ツバメは先ほどと同じ忠告をしましたが王子は聞き入れません。結局渋々金箔を持っていくことにしました。

「王子様の言うとおり金箔を渡してきました」

「見ていたよツバメ君。彼らはとても喜んでいたね」

「王子様も満足されたようですので冬支度に戻ります」

「待ってくれ、ツバメ君。あれを見てくれ。あの荷馬車は道路の通行料を取られて困っているんだ。通行料を無料にすることはできないだろうか？」

「王子様、あの通行料は道路が壊れた時に修復したり、管理している人たちの給料になるのです。無料にしたら今度は彼らが路頭に迷います」

「それならば金箔を彼らに渡して無料にするように伝えてはくれな  
いか」

やはりツバメは先ほどと同じ忠告をしましたが王子は聞き入れません。結局渋々金箔を持っていくことにしました。

「王子様の言うとおり金箔を渡してきました」

「見ていたよツバメ君。彼らはとても喜んでいたね」

「王子様も満足されたようですので冬支度に戻ります」

「待ってくれ、ツバメ君。あれを見てくれ。あそこの子供たちは学

校の授業料が高くて困っている。無料化してあげたいけどどうしたらいいだろうか？」

「王子様。あそこの学校は隣町の住人が通っていて、隣町の町長をあげているのです。あそこの町はこの町の住人を誘拐しては奴隷にしているという噂ですので、無料化することはこの町にとってよくはありません」

ツバメは先ほどとは違う忠告をしました。王子は聞き入れません。結局渋々金箔を持っていくことにしました。

「王子様の言うとおり金箔を渡してきました」

「見ていたよツバメ君。彼らはとても喜んでいたね」

「王子様、もう持っていく金箔が無くなってしまいました。がどうするのですか？」

ツバメの指摘通り、王子は金箔が無くなりみすばらしい石像になっってしまった。

「仕方ないな。でも僕は市民の圧倒的な支持があるからね。もう一度金箔を貼ってもらおう。寄付を集めよう」

するとどうでしょう。先ほど金箔を受け取った者たちは、結局貧しい生活から抜け出すためではなく王子様を再び金箔で包むための寄付としてお金を徴収されてしまいました。

いいえ。それどころか経済的にゆとりがあつたために金箔を受け取ることができなかつた者たちもお金を寄付として徴収されてしまったために却って負担が大きくなったのです。

こうして王子の像は再び金箔に包まれましたが、怒った市民たちが広場に押し寄せてきました。

「ツバメ君、ツバメ君。僕は市民のために色々してあげたはずなのに、どうしてみんな怒っているのだろうか？」

王子様の問いかけに返事はありません。

市民たちは王子の首に縄をかけて横倒しにし、その金箔をそれぞれはぎ取ると家に帰ってしまいました。

後にはボロボロの石像だけが残されました。

ツバメは南の町へと向かう道中思いました。

「言わんこつちやない。あれほど忠告したのに聞かなかつたのは、自分が市民に支持されていると勘違いして傲慢になつたからだろうなあ」

この町にも冬がやってきました。市民が無事に年を越すことができたのはだれかが助けしてくれるではなく、自分で努力しなければいけないことに気付いたからでしょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1761p/>

---

最小不幸の王子

2010年11月27日18時55分発行